



もみじ

明るく のびのび 遊ぶ子ども

令和5年 5月31日

園だより No.3

新潟市立新津第一幼稚園



ピエロだよ

本物が与える感動を、つなげる保育

園長 間嶋 哲

今週の月曜日、(保護者同伴の)春の遠足として、『木下大サーカス』を観てきました。10年ぶりの新潟開催として、新聞をはじめ様々なメディアでも宣伝されていました。当日は、様々な小学校の運動会の代休であつたらしく、とても混雑していましたが、私自身も大変、楽しませてもらいました。

あらためて、本物もつ迫力や芸術性に感動するとともに、本物と出合う大切さを感じたのです。

とはいえ、私自身は、「きっと子どもたちは、サーカスで観た記憶や興奮も翌日になれば薄れ、通常の園生活に戻るのだろう」くらいにしか考えていませんでした。子どもたちが大人になった時、きっと今の私がそうであるように「そういえば昔、親に連れていってもらったような記憶がある」くらいの、遠い昔の淡い思い出になっていくのだろうと考えたからです。しかし、現実とは全く違いました。

翌日は、秋葉区教育支援センターの指導主事が、園を訪問する日でした。園経営の話が終わり、続いて、各保育室を回ったときのことで。2階のもみじ組、すみれ組の保育室や廊下が、ミニサーカス場に変化していました。先生方が、子どもたちの思いを上手に育んでいるのです。

フラフープを使って身体をクネクネしている子どもは、何度も繰り返し挑戦し、汗びっしょりでした。簡単な平均台のようなものを自分で作り、そこを慎重に渡っている子どもは、なんと(自作の)傘のようなモノを手に持ち、バランスをとっています。すべては、前日に観てきたサーカスの団員が大道芸としてやっていたことそのままなのです。まねっこ遊びなのです。せつかなので私も、サーカスに登場した象のつもりで、子どもたちと押し合いっこをしました。

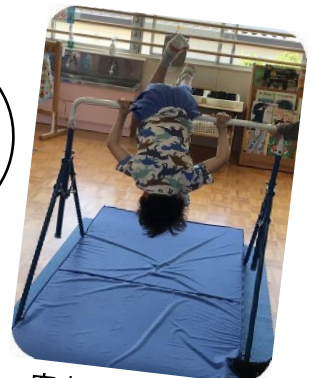
ただ単に、「〇〇へ出かけた。楽しかった」というような、単純な経験や一口感想に終わることなく、自分の眼で観たことや感動したこと・興味のあることを、たっぷりと模倣させていくことは、保育の質の高さそのもののような気がしました。もちろん、サーカス団員みたいなレベルには届かないにせよ、サーカス団員になったつもりで演技を真似てみることで、ほんのわずかであっても、「できた」という思いをもつこと。そして、自分が頑張ってやっていると、できなかったことが少しはできるようになる経験を積み重ねること。これらは広い意味で、自己肯定感にもつながるはずなのです。



いちごライオンの輪くぐり



伝統芸「坂綱」ならぬ一本橋渡り



空中ブランコ! ?

